

テーマ	「学級目標を達成するためのアンケート」の作成・活用による児童の自発的・自治的な学級活動の取り組み
発表者 (所属)	石井雄大（埼玉県公立小学校）
【発表概要】 1. 問題と目的 本研究は、学級目標を達成するためのアンケートを児童自身で作成・活用していくことで、自発的・自治的な学級活動を促していくことをねらいとしたものである。小貫(2024)では、授業 UD モデルとして、「参加」「理解」「習得・活用」を提唱している。授業 UD モデルに沿った「すべての子のために」を実現できる学級活動を目指した実践である。 2. 方法 (1) 対象者：公立小学校 5 年 A 組（男子 14 名・女子 17 名） (2) 手続き：学級目標を定めていくにあたって、年度当初、学級活動（2）の時間を使い、どのような学級にしていきたいか、また、そのために、一人一人がどのような気持ちで生活していきたいかを話し合った。その際、「友達同士で肯定的な声の掛け合いができる学級にしたい」という意見が出た。そこで、「教室内であふれさせたい言葉（例：「最高だね」「やさしいね」など）」を集め、教室内に掲示し、普段から一人一人が意識して生活できるようにした。また、同時期に、保護者会でアンケートをとり、どのような 1 年間を過ごしてほしいかを回答してもらった。保護者の願いも込めて、学級目標を作成することを子供たちと確認した。5 月中旬になり、「教室内であふれさせたい言葉」が浸透してきた段階を見て、学級目標を作成した。学級活動（1）の時間を使い、学級目標に入りたい言葉を出し合い、それらを基に文章を作成した。作成者の想いを聞きながらグループ分けをし、全員の意見を反映できるようにした。学校目標や学年目標と照らし合わせながら最終的に 3 つの文章にしぼり、学級目標として定めた。こうして定めた目標は、「個性とパワーを発揮し 荒波やかべに立ち向かう やさしさと笑顔があふれる 最幸の 5 年 A 組号」であった。2 学期からは、1 学期よりもさらに学校生活を良くしていくためにアンケートを作成し、自分たちで学級目標を振り返る実践を取り入れた。主な流れとしては、①学級目標を達成するためのアンケートの作成・実施②アンケートの実施と課題の分析③アンケートの結果の公表と話し合い④話し合いで考えた策の実施⑤改善策の実施と次回に向けての振り返りである（表 1）。アンケートの視点は、学級目標に即して、「個性とパワー」「荒波やかべに立ち向かう」「やさしさと笑顔」の 3 つであった。質問文は、子どもたちが 3 つの視点に合わせて文言を作成した。学級で意味や捉え方の相違がないかを確認し、質問項目として定めた。また、各視点の質問項目を 1 点～5 点で評価した（表 2、図 1）。実施頻度は、教師と児童で相談しながら、定期的に行った。アンケート実施後は、	

各質問項目の点数を平均値として算出し、グラフ化した。グラフ化した資料は、話し合い活動で用いた。また、教室内に掲示し、日常から意識できるようにした。

表 1 R-PDCA サイクルを基にした実施計画

実施時期	段階	内容
9 月	R (診断)	○診断と課題の明確化 ・学級目標を達成するためのアンケートの作成と実施
10 月～3 月	P (計画)	○取り組みの決定 ・アンケートの結果をもとにした話し合い
	D (実施)	○取り組みの実施 ・話し合いで考えた策の実施
	C (評価)	○成果と課題の明確化 ・アンケートの実施
	A (改善)	○改善策の実施 ・アンケートの結果をもとにした改善策の検討・実施 ・次回に向けての振り返り

表 2 児童と作成した質問項目

個性とパワー	点数
・クラスみんなは、個性を發揮していますか？	
・クラスみんなは、パワーを發揮していますか？	
荒波やかべに立ち向かう	点数
・クラスみんなは、何事もあきらめずに取り組んでいますか？	
・クラスみんなは、全員でクラスの課題を解決しようとしていますか？	
やさしさと笑顔	点数
・クラスみんなは、やさしいですか？	
・クラスみんなは、笑顔ですか？	
そう思う（5点）　まあまあそう思う（4点）　ふつう（3点）　あまりそう思わない（2点）　思わない（1点）	

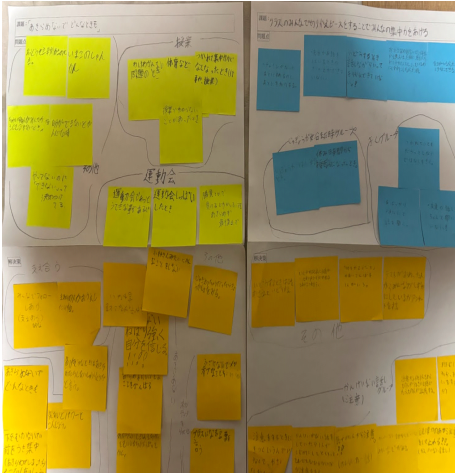
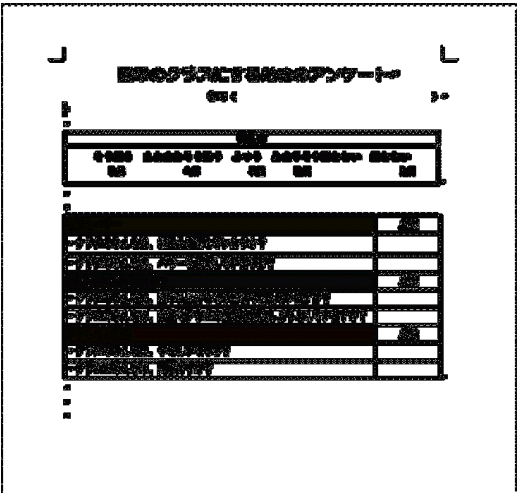


図1 作成したアンケート

図2 付箋を用いた話し合い

表3 アンケート結果

	個性	パワー	あきらめない	課題解決	やさしさ	笑顔
1回目	4.4	4.2	4.2	3.9	4.4	4.6
2回目	4.5	4.3	4.0	4.0	4.4	4.7
3回目	4.5	4.1	4.0	3.7	4.5	4.8
4回目	4.6	4.6	4.5	4.5	4.3	4.7

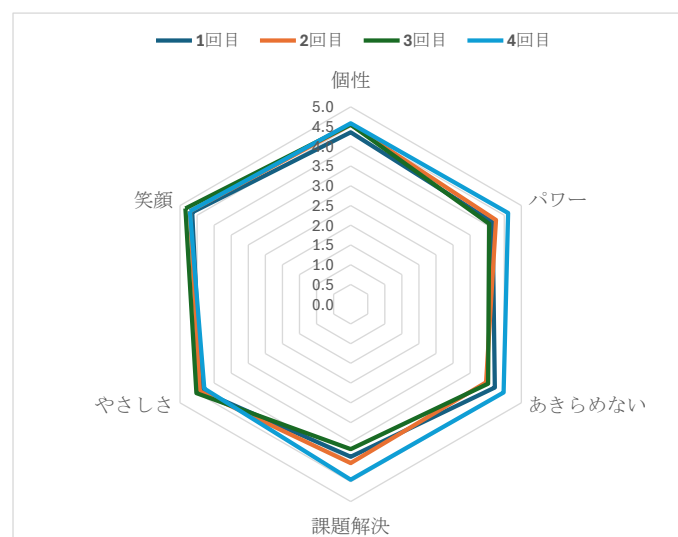


図3 レーダーチャート

3. 成果と課題

（1）アンケートの実施・分析と改善策の実施

学級活動（2）の時間をつかい、アンケートの結果をもとに、以下の話し合いを行った。

①小グループ（4人）をつくり、課題と改善策について付箋を用いて意見を出し合う②全体で共有し、学級としてどのように改善していくのかを出し合う③一人一人がどのように行動していくのかを考え、振り返りを行う（図2）。アンケートをもとに結果を見直し、行動を改善していくことで、課題を解決していこうとする姿勢を高めていくことができた。どのような学級にしたいのかを再確認しながら、現状を分析することで、児童が自ら考え行動していく機会を多く創出することができた。特に、話し合い以外の場面でも、日常生活から課題を見つけ解決しようとする姿が見られるようになったことが大きな成果である。数値の向上はもちろんであるが、あくまで手段である。どのように自発的・自治的な活動に繋げていくのかという過程に着目して実践を行うことが大切である。

（2）児童による振り返り

「学級目標を達成するためのアンケートをやってみて良かったことは何ですか」という質問文による自由記述式の振り返りを行った。得た回答は、木下（2007）の M-GTA（木

下 2007)の手法を参考にしながら、1 概念化(文の意味のまとまりで分類)2 カテゴリーの統合(概念を整理)3 確認 4 修正 5 再確認という手順で行った。「学級に対する想い」「目標の確認」「話し合いの仕方」「意識の変化」「関係性の変化」のカテゴリーに分類することができた。「みんながこのクラスをどのように思っているのかがわかる」「話し合いのおかげで5-2はすごく気が合ってチーム力が上がった」「みんなで意見を話し合ってよりよいクラスにするために、決めたことをきちんと意識していた」といった意見があった。学級目標を達成するために、一人一人が意識を変えて行動し、学校生活の質を高めていったことがうかがえた。

(3) 全体考察

アンケートをもとに結果を見直し、行動を改善していくことで、どの児童も課題を解決していこうとする姿勢を高めていくことができた。「参加」の段階では、児童が学級目標を達成するためのアンケートを自分たちで作成することで「ルールの明確化」や「クラス内の理解促進」を促すことができた。「理解」の段階では、「焦点化」によってどのような学級にしたいのかを確認しながら進めることができた。「視覚化」では、学級の現状をアンケートをもとにグラフ化し、課題や方向性を分析することができた。「共有化」では、分析した課題を児童同士で話し合い、自分たちで考え行動していく機会を多く創出することができた。「習得・活用」の段階では、「適用化/機能化」により課題を解決するために日常生活に活かそうとする姿勢を育むことができた。児童の最終的な振り返りからは、「学級に対する想い」「目標の確認」「話し合いの仕方」「意識の変化」「関係性の変化」といった学びを得ていることがうかがえた。課題としては、適用の可能性を広げることである。今回は、小学校5年生での実践であった。今後は、他の学年や他校種の実践でデータを積み重ねていくことにより、確かな知見が得られると考えられる。

〈引用・参考文献〉

小貫悟(2024)「2. 授業UDモデル」テキストブック授業のユニバーサルデザイン特別支援教育・学級経営 小貫悟・川上康則著 赤坂真二編 日本授業UD学会

木下康仁『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂 2007

文部科学省『小学校学習指導要領解説(平成29年度告示)特別活動編』東洋館出版社 2018